

何がマリアの可能性だよ！

殺鼠剤

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それでもマリアにはランスという方向けになれば作者として望外の喜びな第二部後日譚の妄想です

なお眼鏡属性がお好きな方には辛い描写が多々あるかもしれません

目次

何がマリアの可能性だよ！ | 1

何がマリアの可能性だよ！

RA15年。

ぼつぼつと雲が浮かぶ青空の昼頃に自由都市国家群のとあるのどかな村にて、旧友同士が久しぶりに再会していた。

「いらつしやい、志津香、ナギ」

「お邪魔します」

「うん、お邪魔します」

家主が先に入って歓迎すると、長い金髪を後ろで結わえた魔法使い、ナギ・ス・ラガーが笑顔で家に入っていく。続いて緑色の髪を長く揃えた魔法使い、魔想志津香が戸を静かに閉める。

「今お茶出すからねー」

天候も快晴で、窓から差す太陽の光が程よく温かい。

小さなコップを避けて湯呑を食器棚から三つ取り出し、茶葉を煮立てていた急須で熱い茶を注ぐ。蒸気が立って眼鏡が少しだけ曇った。

「ありがとう。いやー、テントや宿じゃなくて家でのんびりできると思うと体が安息を

求めてすぐだれちやうよね」

「飯にも自宅じゃないんだから、もう少ししやきつとしなさい」

「はーい」

ナギは姉の志津香に従って、食卓に突っ伏していた上半身をのっそりと起こす。少し抜けた妹を見る目は慈愛に溢れていたが、先んじて茶請けの菓子ちゃっを一口食べている。実はどちらも自由な気質だった。

お盆ぼんに湯呑と追加の茶請けを乗せて運び、食卓に並べていく。

「はあーあつたかい。落ち着くなあ」

「まあ今くらいは大丈夫でしょう。あいつも襲襲つてこないだろうから」

ごく普通、自然体。しかしこの仲良し姉妹は最近ずっとあることに悩まされていたはずで、縁遠いものだった。

憑つき物が落ちたような二人を見て嬉しくなると共に、意を決して問いかける。

「そのようすだと解決した、つてことでもいいの?」

親友の問いかけに志津香が答える。

「うん。あいつはもう呪いから解放された。流石にあれを超えるだけの迷惑をかけたりはしないと思うわ、マリア」

マリア・カスタードにとつてこの16年間は地獄のように辛い日々だった。

そもそも想い人が女性に關してどうしようもない節操なしで、そのくせ一番大切に想っている女の子をいつも奴隸として侍らしていた。本人は見せつけている気持ちなどわずかにもなかっただろうけれど、マリアにとつては会うたびに気が気じゃなかった。奴隸のシイル・プラインも大切な友達であり、想い人と友達との間で揺れてもいた。特に16年前、バード・リスファイという冒険者によつてシイルが命を奪われてからは自責の念が強まつて視野が狭まつていた。バードがシイルを恨むいきさつにはマリアや志津香らが引き起こしたカスタム沈没事件が大きくかかわっていた。非常に大きな迷惑をかけてしまった負い目が、一時期のエレノア・ランのように周囲を心配させる悪い方向に進ませてしまった。

「それもこれも全部あのバカのせいよ。周りのことなんて気にせず、いつもいつも騒動ばかり起こして」

「でも、あの子達のおかげで正氣に戻ったわけだし。私達は生粋の冒険者になつてしまつたけど、どこかで腰を落ちて着けてのんびり暮らすのもありじゃない、お姉様？」

茶と菓子子の半分を消費して、想い人とその子供たちによる魔王の呪縛からの解放について顛末を語り終えた二人は、ようやく終えた一大事の重みによる反動からか、口々に語る。

「そっか、ちゃんも解放されて、シイルちゃんも救われたんだ」

マリアは聞き入っていて、湯呑の中身は少しだけしか減っていなかった。

想い人は規格外な人物のため、魔王をやめて大本となる魔血魂を破壊したことも大怪獣クエルプランを倒したこともあり得ると納得できる。だが腹部に大きな穴を開けられたシイルが生き返るとはどうしても思えなかった。彼女の葬儀に参列して、複雑な感情を抱きながらも帰ってくることはないと思切っていた。

「シイルちゃんを愚直ぐちやくに信じていた方が正しかった、のかな」

「それはどうかな。私も子供心にシイルお姉ちゃんとはもう会えないって思っていたよ」

「ナギの言う通り。誰がどう見ても子供の癩癩かしゃやくでしかなかった。それがどうにかなったのはあいつが信じたからじゃなくて、周りの皆が頑張つてあげたからよ。マリアも含めて」

「ありがとう。でもそうは思えないよ」

想い人が魔王になって、シイルという消えてしまった大切な人を追いかけていた。マリアはそんな想い人を止めようともがいて、足搔あがいで、手酷く振られた。

当然だった。想い人が魔王の破壊衝動に何とか耐えられていた理由の一つは間違いない。シイル・プラインを取り戻すことだった。それを諦めさせようとしたマリアはある

意味で勇者ゲイマルクよりも世界に破滅をもたらそうとしていたかもしれない。

何より、想い人には底知れぬ力がある。どんな難事が立ちまはだかろうとも、絶対に打ち破つて常人には予想できない偉業を達成する英雄の力だ。信じられなかった自分が悪いと、マリア自身も結論付けていた。

「マリア、その」

「いいのよ、自分で決めたことだから。それより、一緒に旅していた子達のことをもっと教えてほしいな」

無理に微笑ほほえんでそう伝える。露骨な話題そらしだったが、志津香とナギは乗ってくれる。

「皆いい子だったよ。乱義もリセットも立派になって、ザンスは相変わらずからかい甲斐があつて」

「ザンス達は今難しい年頃なんだから変にからかいすぎないようにしなさい」

「えーいいじゃない、家族の軽いスキンシップだつて。元就はなんかずつとああいう性格でそつち方面には反応なさそうだし、エールもどちらかと言えば元就寄りでしょ？」

「全くこの子は。姉らしく導いてあげるとか、もつとできることがあるでしょう？」 あ、

エールはクルックーさんの子どもで、基本無口だけど不思議な子でね」

そんなふうには、楽しそうに兄弟姉妹のことを話す二人が、マリアにはまぶしかった。

どうして私はあんなふうになれなかったのだらうと、意味のない後悔を湯呑の茶から立つ蒸気で時折曇らせた眼鏡の裏でずっと隠し続けた。

夕暮れになり、外から差し込んでいた日の光はなくなっていた。二人とも今晚は泊まっていつてくれるらしい。ずっと一緒にいらればと思ひもするが、二人とも今は冒険者だ。旅のために必要な物を買ひ揃えるために村を散策すると言つて一旦出てしまつた。

「はあ」

静かになつた居間で誰に聞かれることもない溜息を吐いた。

ランともミルとも連絡は取つてゐるし、普通に親しい人と出会つてゐるのに、なぜか寂しさを覚えていた。理由は自分でも痛感する程に分かつてゐる。

想ひ人も友達も前を向いて新たに進んでゐるのに、自分だけが取り残されてゐる。錯覚ではないそれマリアは振り払えないでゐるからだ。

一人で寂寥感せきりようかんを抱えてゐる時はよく悪い方向に思考が向かつてしまうものだが、しかしふと考へてしまふ。

「ゲイマルクに協力していたらどうなつていたかな」

勇者ゲイマルク。魔王を倒す勇者の役割を全うするために世界人口を30%も減らした勇者災害を引き起こした人物。しかもまだ魔王を殺せるだけ人口が減っていなかったためさらに間引こうとしていたというから、恐怖心すら麻痺してしまう。

最終的に魔王によってゲイマルクは打倒された。本来人間の脅威となる魔王と、人間を救うはずの勇者の立場が逆転した。この16年間、東ヘルマンという形で反魔王の機運が生まれつつも決定的にならなかつたことにはこうした背景がある。魔王になつてもなお人類を救う存在に、混迷の時代の人々は希望を見出さざるを得なかつた。

だけど。

魔王に痛烈に振られたあの頃のマリアにとって、ゲイマルクこそが希望に映つてしまつたことが一度だけあつた。

「どう、お姉さん？俺に協力する気になつた？」

RA4年。夜の帳とばりの向こうでかすかな炎の明かりが見える時に、右手のエスクードソードを玩具のように軽く振り回しながら、無感動な目つきでマリアに投げかけてきた。

ふざけた言葉だつた。魔王を倒すために人類を殺して回る。理屈が通つていようで全く存在しない。結局は魔王の代わりに勇者が君臨する世界になるだけだ。勇者が

勝手に決めた規範を守らなければ魔王を殺すためという大義名分で処刑される、抑圧よくあつで窒息ちっせきしかねない世界の到来。しかも被害をほとんど出していない魔王に比べて現代の勇者ゲイマルクは明らかにやりすぎな被害を出し続けている。カイズやイタリア、マリアが訪れたことのある都市で目を覆いたくなるような惨状さんじょうを作り続けている。

助力なんでもつてのほか。さっさと消えなさい。

と、簡単に切り捨てられたらよかつたのに。

「あいつ酷い奴だろ。お姉さんみたいな才女を振り回してあげくに残酷に切り捨てる。でもお姉さんはまだ良い方かもしれない。あいつは魔王だ、知りもしない相手なら認識する前に斬殺するんじゃないか？」

耳障りみみざわはおかゆフィーバーの肌ほどもよくなかつた。ゲイマルクが語る内容は勇々らしくもないマリアの個人的な復讐。外側から見れば、魔王に精神を虐げしいたられた哀れな女性ゆえにそんなことをしたいと想像してしまいうらしいと臍氣おぼろけに感じた。

そもそも、マリア一人を勧誘するために近隣で小火騒ほやぎを起こす悪人に手を貸すつもりは微塵みじんもない。仮に復讐心が芽生えたとしてもかつての志津香のように自分だけでやり遂げる。加えて想い人との関係に赤の他人を引き入れたくない。昔、志津香の代わりに抱かれるということは何度かしていたが、その実、想い人に相手をされたかつただけかもしれない。

「チューリップシリーズの力はよく知っている。第二次魔人戦争で大活躍してからずっと、各国で導入が始まっている。単純火力的には魔法使いの部隊と同等に運用できるからね。リーザスはその前から使っていたから数多くあるみたいだし、次に人を減らすのに狙い目かなと思ってるんだけど、どう？」

忌々しい。マリア自身が仲間と共に作り上げたチューリップシリーズを使って人口の削減さくげんを行うなんて。しかもそれを本人に向かつて言うなんて。率直に、怒りに身を任せてレンチで撲殺ぼくさつしたいと技術者の矜持きやうじが訴えてくる。

だけでも、甘言かんげんに惑わまどされないと言い切れなかった。

ゲイマルクの言葉はなぜか聞いてしまう魔性があることも原因だが、それ以上にマリアには耐えられないという強い思いがあった。

支えてくれる人が皆無ではない。魔想志津香をはじめ、ミル・ヨークス、エレノア・ラ
ン、ナギ・ス・ラガール、カスミ・K・香澄……数多くの友人が、仲間がいてくれる。

だがそれは決して立ち直れる保証ではない。マリア本人が、周りにいてくれる皆が、
どれだけ頑張ってもどうしようもない時がある。

そこに、するりと心の隙間にゲイマルクが忍び寄ってきた。言っていることも滅茶苦
茶で、やりたいことははっきりしている。どこかの誰かと似ても似つかないよう
で、世界を良くも悪くも動かしてしまう飛び切りの大物。流されるに足る何かが、そこ

にはあった。

「協力してくれたら、きちんと見返りは渡すよ。親しい友人を傷つけられたくないだろう? 見逃すし、魔王がきても助けてあげよう。ああ、お姉さんの友達だったら協力してもらえる方がいいかもね」

口角を少しも変えない表情で、ゲイマルクは答えを待つ。別にどちらでもいい、と言わんばかり。余裕があるようで、誰も見ていないだけの顔つき。

否定する材料はいくらでも並べられるのに、一つ掲げることさえ諦めてしまう。

下らない男の顔が、最近手入れされてない曇った眼鏡をかけたマリアにとって希望のように見えてしまった。

そして――。

ばたーん!

「がーっはっはっは! ここにいるんだな。おいマリア、いるなら返事しろ」

大きな音を立てて玄関の扉を開けて、扉にも勝るような大口で笑う。

「あ、あ、あ」

いきなり物思いにふけついているところから現実に戻されても、言葉が上手く出てこない。

忘れもしない想い人。最近まで魔王として世界に恐怖と破壊を振りまき続けた男。子供のように無邪気で恐れを知らず、誰よりも強い心で多くの人から愛され続けた人。「む、暗いぞここ。そろそろ夜なんだから明かりをつけろ。研究ばかりしてて昼夜も分からなくなつたのか？」

「ランス様、そんなふうには言わなくとも」

緑の服と銀色の鎧に包まれた戦士の傍らには、16年前に死んだと思つていた大切な友達が変わらない容貌ようぼうでいた。

危うく冷め切つた湯呑を落としそうな程に全身から力が抜けて、ようやく口から意味のある言葉を出せた。

「ランス？」

「おう、俺様以外にこんなかつこいい男がいると思つたのか。お客様を早く歓迎しろ、マリア。がははは！」

部屋の明かりをつけて、窓から外を軽く照らして見てもまだ志津香とナギが帰つてくるようすはなかった。

とりあえず二人に茶を出すため再度熱していると、チューリップの模型いじくを弄る音が聞こえてくる。

「ちよつと、いたずらしないですよ」

熱い茶を注いだ湯呑をランスの前に差し出して、じつと見つめる。

尊大そんたいに座ったランスは居間に飾ってあつた模型を触っていた。危なっかしい手つきでありながら、どこか楽しそうに見える。魔王だったことが嘘のように、かつてのランスそのものだ。

「少しくらいいいだろう、ケチなやつめ。にしてもお前もまた変な物を作つとるな。模型趣味とかどうかしちまったのか?」

「それはないと思いますけど。ほら、マリアさんはチューリップシリーズを開発されていますから、きつとそのための模型ですよ」

シイルはまだ荷解にほどきしていて席に座れていなかっただらしく、ようやく食卓の前に来る。こちらも昔と同じく白い奴隷服を着て、まだ若い肌をさらけ出していた。羨ましいという気持ちを隠しつつ茶を差し出して同意する。

「シイルちゃんの言う通り。ランスが触っているのは前にイラーピユ探索のために作った4号の改良型。実際に作りたいけど、いろいろあつてまだ作れなさそうだから」

「ふーん、まあいいや」

前触れもなくランスは模型をばいー。

「何するの!?!」

慌ててマリアは席を立てて改良型チューリップ4号の模型を掴む。力加減を間違えれば模型も壊れ、自分の手も傷つくかもしれないため、安堵のため息をつく。

「ランス様、やめましょうよ。ただでさえ夜分遅くに失礼していますし」

「うるさいぞシイル。奴隷なら黙って主のことを肯定するもんだろ。それよりもマリア、今日は言いたいことがあつて来たのだ」

「言いたいこと？」

傲岸不遜なランスの言うことなら経験上慣れている。いつも無茶ばかりを注文して困らせてくれているが、志津香とナギが幸せそうだったこともあり、ある程度までなら聞き入れようと考えていた。傍目からも酷い別れ方をしたと捉えているけれども、想い人のこととなると未だに甘くなってしまうらしかった。

「それはだな、えーと」

普段のランスらしくもなく、優柔不断に何も言えない状況が続いた。明らかに焦っているけれどマリアにはどうしたいのか欠片も分からない。

「むむむ」

「むむむ、じゃなくて話してくれないと分からないわ。シイルちゃんが話してくれればいいんじゃない？」

「いえ、私から言うようなことではないので」

「そうだ！ シイルの口からじゃだめなのだ。こうなったら今日はマリア、お前の家に泊めろ」

「ええ!？」

戸惑いがちに否定したシイルの言葉に乗っかって、大声で無茶なことを言い出した。

前言を撤回する気分だが、今日はもう志津香とナギを泊める約束をしている。流石に魔王の愛人呼ばわりされていた二人をこれ以上ランスに振り回させるのも気が引けた。

「今日は本当にだめ！ 何とか一番良い宿を押さえるし宿泊費も出すからそつちへ移つて！」

「何を言う。マリアじゃないとだめだ。別のところには行かん」

マリアじゃないとだめ。その程度の言葉にマリアの心はどうしようもなく動揺した。さんざんな気持ちで別れたにもかかわらず、いつまでも人の心に居座っている。20年以上も悪い人に引っかかって、カスミのことを言えない状態だ。

そして、心のどこかでマリアに我を通してくる当たり前のランスがたまらなく嬉しかった。

そのまま押し切られてランス達を泊めることになったが、ランスがいない間にせめてシイルには事情を説明する。

「確かに、お二人が先に来られたのでしたら本当に邪魔してしまいますね」

「うん。二人とも長旅で疲れていると思うから、今はそっとしておいてあげたいんだ。悪いけどシイルちゃんからもランスに言っておいてあげてくれない？」

そんな会話をしている最中、両手はランスの好物を作るために動いていた。まずは晩飯ということでランスに望まれるまま料理に至っている。隣で手伝ってくれているシイルの手つきは相も変わらず、魔王の永久氷結の呪いから解放された後遺症はなさそうだ。最も、第二次魔人戦争時も厳密には呪いにかかったままだったらしいから関係ないかもしれない。

「申し訳ありませんができません」

はつきりと断られた。マリアの食材を切る手は止まったが、シイルの下拵えの手は止まらない。

「後で私がお外に出て、志津香さんとナギさんを見つけます。そしてわけを話してお願いしてきます。だからそれまではどうか、ランス様と一緒にいてあげてくださいませんか？」

一つの作業が終わって、シイルがマリアに顔を向ける。シイルには昔からこういうところがある。芯の強い、貫くべき時に貫くべきことをする意志。魔王ジルを追って異空間に消えたランスを助けた時も、JAPANでランスを庇って魔王の呪いにかかった時も。

マリアではできなかったことをやり遂げてランスをずっと支え続けていた。

「あなたはそれでいいの?」

必要のない確認だった。そも何に対していいのかわからないで、たぶん曖昧あいまいな意味すらなかった。

「はい。私はランス様の奴隷で、ランス様のなさりたいことをお手伝いする助手のシールちゃんですから」

冗談めかして言えるその立場こそ、マリアも、きつと志津香も求めてやまないものだった。吹っ切れたと思いついていたのに、時が経ってからまざまざと見せつけられると言いきれない悪いものがこみ上げてくる感覚に襲われる。

「おい、できたか」

流れを断ち切って、いつの間にか戻って来たランスが台所に現れる。鎧はとうに脱いで見慣れた緑色の普段着の出で立ちだ。

「もう少しででき上がります。楽しみにしてください」

「そうか。じゃあマリア、来い」

がし、とマリアの腕を掴む。マリアが疑問を挟む余地もなく、元魔王の膂力りよりよくで引きずられる。

「ちよつと、ランス!? どういう気なの!」

「がはは、いいから来い。シイルは飯をきちんと作るよーに」

「はい。あの、乱暴はしないでくださいね」

「俺様は紳士だからするわけなからう」

「ランスが言っても説得力がないでしょ！」

何とかエプロンを脱いで食卓の上に置き、そのままマリアの寝室へと連れていかれた。

席を立て何をしていたのかと思えばマリアの寝室を探り当てていたようだ。かつてのランスであればやることは一つだったが、マリアももう三十路を超えていた。ランスの守備範囲から外れているので何も起こらないはずだ。

「強引なんだから。ランスは変わらないね」

「俺を変えられるのは俺だけだ。他の誰にも勝手に変えさせない」

言葉の態度とは裏腹に、ばつが悪いとランスの顔に書いてある。やはり魔王となつていた時期は苦い記憶となつているようすだ。マリアは寝室の戸を閉めてランスの出方をうかがつた。

うんうん唸りつつもランスは目を見開いてマリアの瞳を真っ直ぐに見つめる。

「マリアー！」

あまり大きく張り上げた声ではなかつたけれど、マリアは緊張して一瞬だけ体が

強張^{こわば}った。

「すまなかつた」

続けて放たれた力のない言葉に虚を突かれた。

あのランススが謝った。驚天動地^{きょうてんどうち}の事態だ。マリアも付き合いが長いための限定的でもランススが謝れる人間であることは知っている。魔王に支配された時は別人としても、今のランススやはり冒険者だった当時と変わらない。

「ランスス、どうして」

今日は衝撃的なことばかり起きる日だ。マリアからすれば脈絡^{みやくらく}もなく謝罪するランススがまるでミラクル・トーに見せられた異世界の存在のように思えた。

俺を変えられるのは俺だけだと言い切ったからには、きっとマリアのところに来て謝罪したこともランススの意志だろう。

「お前に酷い言葉を突き付けたことがあっただろ。だからその、詫^わびだ」

理屈はきちんとしていて。理由も理解できる。馬鹿正直な程に真つ当だろう。

だからこそ納得できない。あのランススが、十年以上経ってからこうして謝罪のためだけにマリアのところまで来たことが受け入れにくい。知らず知らずのうちにランススに勝手なイメージを押し付けていたと知った。

ランススは意外と素直な人物だ。その評価は子どもにこそすれど大人にはしないよう

なもので、ゆえにひたむきで純粋なランスには当てはまる。

「悪かったな」

もう一度謝ってくる。投げやりな印象を持ちそうになるけれども、視線も顔もマリアの方を向き続けている。眼鏡によって正しく網膜もうまくに映し出されたランスの姿に英雄の面影おもかげはなく、どこにでもいる弱さを持ち合わせた普通の人にしか見えない。

そんなランスの姿に、二人が来る直前まで回想していたゲイマルクとの過去が再開した。

そして——ゲイマルクの魔の手を取ってしまいそうになる、その時だった。

いきなり暗闇の向こうから斬撃が飛んできたかと思うと、次の瞬間には爆発音が轟とどろきゲイマルクが立っていた場所に地割れにも似た深く鋭い切れ目ができていた。

吹き飛ばされるかと思ってしまう威力の攻撃はマリアには突風程度の影響しか与えなかった。驚いた拍子ひょうしに眼鏡を落としてしまつて慌てて探してしまう。

土埃つちぼこりにまみれて絶対何も見えないと確信できる眼鏡を、仕事で汗を拭ぬくためのハンカチで拭ぬつて、改めてかけ直す。

眼前には黒いマントが垂れ下がっていた。

全身を覆う禍々しい暗黒の鎧に、魔王特有の重圧を伴った気配。ただ存在するだけで

空気が底冷えしたように錯覚し、心臓の鼓動が止まって息が詰まりそうになる。

やや奥に視線を移せばゲイマルクが左腕をぐしゃぐしゃにされながらもエスクードソードを構えていた。勇者のみが扱える伝説の剣で防いだようだが、魔王の一撃を殺し切るには至らなかつた。

「ぐう！ そうか、お前が、魔王か！」

無感動な目つきはどこへやら、今はぎらぎらした眼光を対峙する敵に向けていた。

「初めまして、だね。だが今はまだ、うう、エスクード、ソードのモードが、はあ、完全じゃない。戦うのは、また今度だ」

「やかましい」

不可視の力が放たれ、息も絶え絶えのゲイマルクを大きく突き飛ばす。幾本かいくほんの木々とぶつかってへし折り、最後に一本の木にぶつかるとそこにはりつけにされたように動かない。あのゲイマルクをいとも容易く取り押さえた。エスクードソードを手放していないことは曲がりなりにも勇者であるからか、本来ならきょうたん驚嘆する場面だ。

しかし魔法を使えない典型的な戦士だった頃のランスを知るマリアにとつて、指向性の衝撃波は改めて想い人が魔王になってしまったという事実を突き付けられ、目を背けなくなる。これなら眼鏡をかけ直さなければ直視せずに済んだ。下らない後悔だった。「いいか勇者、お前がどこの誰だろうとどうでもいい。だが脳みそがわんわんの半分程

度でも残っているなら覚えておけ」

兜かぶと越しに愛しい人の声が聞こえる。最後に別れた時からずつと頭の中で反響していた、誰よりも自信に溢れていたはずの声。魔王になってからは何も込められなくなってしまうそれが、マリアにはなぜか熱を帯びおているように感じられた。

魔王ランススは利き腕だけで剣を振るい、人外になったことを隠そうともせず邪悪な魔力を周囲に飽和させる。

「俺の女に、手を出すんじゃないやねええええー!!!」

魔力を纏まとった斬撃は嵐の如きうねりを発生させ、ゲイマルクを大いなる奔流ほんりゅうの中に飛ばす。青々としていた木々の葉っぱが散るところか、太い枝や木そのものが宙を舞って魔力と斬撃に破壊され、消滅していく。この情景を無理に表そうとするなら、それは魔王の一言に尽きる。

冒険の中で戦った数々の魔人、闘神、聖獣、悪魔、そして同じ魔王のジル、それら的一切が見劣りしてしまう。

(ああ、だけど)

ランスに連れ回され、自慢のチューリップで魔物と戦闘していた時。ランスの背中に隠れていると、何のけがも負わなかった。

まるでその時に戻ったみたいなのに、マリアには何も起こらなかった。

「ちっ、あのちび従者め。勇者を逃がしたか」

ランスは呟いた。おそらく先の戦争でアリオスに付き従っていた黄色いフードに白髪はげの少年コーラが何かをしたらしい。マリアからは何も見えないが、魔王になると視力まで強化されるようだ。マリアは少しだけ羨ましかった。

ランスはゲイマルクへの興味を失ったようにマリアの方に振り返った。

「無事か」

闇夜に溶ける漆黒の色の中で赤く光る四つの目を意向として取り入れた兜から、ぶつきらばうな確認の声が届く。クルツクーから伝えられていたような、魔王の人格に乗っ取られているわけではなさそうだ。

「うん。ありがと、ランス」

「そか」

自分でも不思議に感じる程に、すんなりと感謝の言葉が出てきた。素っ気ない返事がいつも通りすぎて心地よい。目の前に広がる大惨事もランスと一緒になんてことない慣れたできごとだと思えた。遠くから聞こえてくる声の内容も小火騒さわぎが収まったもので、平穏とはいかないまでも一難をやり過りごせた達成感がマリアの力りきんでいた体を弛しかん緩させる。

からん。

ランスが剣の柄を手放し、地面に落ちた。

「ぐ、ううう」

マリアが反応する間もなくランスが突如うずくまり、両手で兜の上からさらに顔を覆い隠す。

マリアも屈んでランスの容態を見ようとするが、乱暴に手を払いのけられる。一瞬、兜の隙間から見えたランスの面立ちおもだに疎すくんでしまった。

「魔王様——」

小火があつた場所とは別の方面から可愛らしい声が響き渡る。第二次魔人戦争で共に戦つた魔人サテラのものだ。魔人達は戦争終結後もランスの元にいられて羨望せんぼうを覚えたものだが、最近は全然考えていられなかつたので忘れていた。魔人は魔王と共にある。ここに魔王ランスがいるならば、お付きの魔人がいるはずだった。

マリアの意識がほんのわずかにサテラにずれた。
「が、ぐ。す、スリープ」

苦しみの中で理性を絞り出すような声が入る。こらえ切れない眠気に襲われて、マリアはまぶたを簡単に閉じてしまう。リセットと同じくスリープの魔法を扱えるとは親子として似てきたものだと思つた。

サテラのせわしない足取りを地面から伝つて感じつつ、マリアは垣間かいま見えたランスの

表情を思い起こしていた。瞳孔は血の如く赤く染まり、しかし歯を食いしばってマリアを見ていた。乱暴に手を払ったわけはランスがマリアを傷つけたくなかったからだ。

深紅の瞳はマリアに敵意を持っていなかった。明らかにマリアという『俺の女』を案じていた。きつとランスはもう魔王の人格に長くは抵抗できない。もしかしたらほんど屈しているかもしれない。

だけどランスは来てくれた。魔王だから守ってくれたわけじゃないと信じられる。シルではなくマリアのために、苦痛を大仰な鎧おおきょうで隠して助けてくれた。魔王という常人ではどうしようもない力に、精一杯抗ってくれた。

まどろみの中で自分でもばからしくなる程、曇っていたマリアの心は晴れ渡った。それがランスによって起きたという事実が、たまらなく嬉しかった。

マリア・カスタードは既にランスを許している。あの日、ゲイマルクから守り抜いてくれたこと、実は身に着けていた黒いマントを眠っていたマリアにかけてくれたこと、俺の女と言い切ってくれたこと、他にもたたくさんのことがマリアの心に溜め込んだ汚れを綺麗に拭い去ってくれた。

だけど律義に謝りに来たランスが愛おしい。ランス自身のために謝罪した部分も大いにあるかもしれないが、だからといって否定する気も起きない。ランスが今もまだマ

リアを覚えていて気にかけてくれたことの方が嬉しい。

「じゃあな。せっかくだから飯は食っていくが、その後はすぐ出ていく」

言いたいことだけを言つてランスは寝室から出ようと扉の取っ手に手をかける。

「待つて」

そんな勝手は許さないと、今度はマリアがランスの腕を掴む。11年前は離してしまつた想い人を、今度こそ逃すまいと力強く。

「何か言いたいことがあるなら特別に少しだけ聞いてやるぞ。すこーしだけな」

目の色は人間だつた頃に戻っているけど、マリアの無事を安堵していた魔王の瞳と変わらない親愛の情が浮かんでいた。

「ふふふ。あはははは！」

「何がおかしい！ 別に笑われる許可は出してないぞ！」

唐突に笑い始めたマリアを見てランスは驚いたようすで突っ込みをする。ランスと話していると楽しいと思えてくる理由の一つは、間違いなくランスの面白さに起因していた。

「ランスが周りに大迷惑をかける人だつて、もう十分知ってるよ。でも、一緒にいたかつたからいたの。ランスのことは許します」

呆けた顔が写真に撮つて一生大事にしたいくらい見ものだった。これだけで今日ラ

ンスと再会できてよかったと心の底から思える。

だがマリアは満足しない。また一歩、ランスに踏み込む。

「ランスはさ、私のことどう思ってる?」

「へ?」

「あれから随分経っちゃったけど、ランス自身はどう思っているのかな、って」

「だから謝つただろう」

「そつちじゃなくて、何かない?」

ランスは予想だにできなかった問答に悩み込み、彼らしい言葉を呟く。

「いい女だなー、とか。ヤリてー、とか」

直球な物言いにまた笑うと、ナギがザンスをからかうように囁く。

「なら、女性を寝室に連れ込んだら何をする?」

「そりやもちろんセックスだが、しかしお前はいいのか?」

「どういう意味?」

年齢ではねられる可能性は考えていても、マリアの意思を聞いてくるとは想定していなかった。魔王をやめてから遠慮というものを学び直したということだろうか。

「もう新しい男くらいおるだろ」

だだを上手にこねられない子どものように視線を外した。ランスの方から別れを切

り出した手前、マリアを独占できるはずもないと諦めていたようだ。おばさんになったマリアを見て抱きたいと思ってくれる男性がどれだけいるか。高望みをするべきではないが、脂ぎった禿げ頭のおっさんが気持ち悪い熱視線を胸や臀部でんぶに注いでくるくらいしかない。生涯痛い女でいいからランスとの思い出に浸りひた続けたかった。

「私は今も昔も女泣かせな男ひとに捕まってる。そのせいでずっと前の結婚話も破断、この年になっても恋人一人作れない。なのにその人は、女の子を平等に愛してるってうそぶいて、本命の子だけはいつも連れ立っている。本当、悪い男ひと」

流石のランスも察しがついた表情で目を見開いてマリアを見つめる。

「マリア・カスタードは、これからも何があっても、ランスただ一人を愛し続けます。これで伝わったでしょ？」

ごく自然に、ランスの手を引いてベッドに腰掛ける。

「もう一度聞いわ。ランスは女性を寝室に連れてったら、どうする？」

「むむむ」

ランスは百面相ひゃくめんそうのように表情を変えて、噴火ふんかの如く大声を出した。

「もう辛抱たまらーん！ マリア、もちろんセックスするに決まってるぞー！」

素早く緑の服を脱ぎ捨て、ランスの全身が裸となってあらわになる。ランスは慣れた

手つきでマリアの服を脱がして、ベッドに押し倒す。

「先にお風呂に入らなくてもいいの?」

「ちつつち。まずここでセックスしてから改めて風呂に入りながらやる。そしてベッドに戻ってまたするのだ!」

「それだと汚したベッドに戻ってくることになってめんどうよ?」

「シイルに後で片付けを言いつければいい」

「うわあ、女の敵だ」

やはりシイルの立場に憧れるものではない。何がしたくて愛する人と友人の事後の後始末をしなければならぬのか。

「ん」

ランスの方から優しく口づけされた。つえばむように唇を重ねては離れてを繰り返して、十分温まったところで舌が入ってくる。

冷たい凌辱りようじやくを耐えた時はこんなふうかんろうに抱かれず、熱を帯びて唾液の一滴が久しぶりすぎて甘露かんろうだと舌が味を感じ始めていた。心臓が想い人の体液を麻薬と錯覚したみたいに早鐘はやがねを打ち、全身が風邪の如く発熱した。

つう、と口と口の間に橋が一瞬かかって、ランスを求めてみつともなく舌が飛び出した。

眼鏡を早わざいで外され、かけずともはつきりしているランスの凛々しい顔と見つめ合う。

「するぞう」

今更だが、今日泊まりに来てくれた志津香とナギに申し訳ないことをしている自覚が芽生えた。だが、この火照りは止められない。心中で真摯に謝っておく。

「うん。来て、ランス」

ランスから倒れ込むようなキスを受け止めて、今日最初の睦み合いが始まった。

ランスとマリアならどうするか予想できていたシイルは夜食の支度が一段落着いてから、玄関を開けて志津香とナギを待つことにした。何度も身に染みた一抹の寂しさを外の空気で紛らわせる目的もあった。

「やつほ、シイルお姉ちゃん」

「こんばんは、シイルちゃん」

しかしマリア宅に入らず、玄関の横で世界有数の魔法使いの姉妹は立っていた。

「志津香さん、ナギちゃ、ナギさん。どうしてマリアさんのお家にも入らずにここにいるんですか？」

「ここに邪魔しちゃうのはねえ。お姉様の嫉妬心じゃあるまいし」

「そんなことしないわよ」

妹の冗談に姉が冷たい視線を送る。第二次魔人戦争の折、ミックス・トーとあまり変わりない身長だった二人がこうまで成長していると否が応でも時の流れを理解させる。

魔法使いの帽子のつばを調節して目深に被り直し、志津香はふつと微笑んだ。

「あいつがマリアのところに来る理由なんてスケベなことしか思い浮かばない。でも、それだけじゃないんでしょう?」

志津香の言う通り、ランスがマリアの家を運んだ理由は面と向かって謝ることだ。もう一度世界を回るといふ名目で、ランスが懇意にしていた女性達に謝罪行脚している。一年、いやもつと時間がかかるかもしれないが、ランスもシイルも諦める気はない。

最も、ランス本人はその意図を絶対に認めはしないだろう。

「ランスも前を見据えて進んでいる。マリアのためにも、その邪魔はしないわ」

「でもさ、私はランスに会いたいかな。また遊んでもらって、笑い合って、エッチしたい」
「あ、あはは」

幼少を知っている少女が愛する主人と性交を求める姿に、乾いた笑いで返す程度しかシイルの処世術は及ばなかった。ある意味、歪まず素直に育つたと言えるかもしれない。

しかし外にいても寒いだけだ。迎えようと思っていた二人がいるなら丁度いい。

「今お夜食を作っていて、そろそろできあがると思います。ランス様とマリアさんもすぐにおいでになられないでしょうか？」

「お、いいね。久しぶりにシイルお姉ちゃんのご飯が食べたくなってきちゃった」

「ここで待っているのもあれだし、ご相伴しやうばんに与あずからうかしら」

同意してくれた二人を中へと迎えながら、シイルは一人呟く。

「幸せになりましたよね、マリアさん」

「あ、そうそう。シイルちゃんは知っているかしら」

「何でしょう?」

志津香からの問いかけにマリアの家の戸締りを確認しつつ応じる。

「ちよつとだけマリアの食器棚を覗いて見たんだけど、明らかに子供用のコップやお箸、お茶碗ちやわんが置いてあったのよね」

「あ、私も見た。お菓子の買い置きがどうも子どももつぽい味付けの物が多くなってたよ」

「え、それってもしかしてマリアさん、もうお相手がいるつてことですか?」

シイルの脳裏にランスではない誰かと仲睦なかむつましい結婚生活を送るマリア、そしてのっぺらぼうの男性と子どもの想像図が浮かぶ。

「あはは、違う違う。チルデイさんのところにアーモンドっていう可愛らしいランスとの子どもがいるんだけどさ、鬼畜王戦争時代はランスの子ども、いろんなところで生まれているのかもしれないってこと！」

ナギが明るく衝撃的な話をシイルに突き付ける。鬼畜王戦争というごく最近知った世界規模の戦争が、まさかそこに波及はまきゆうするとは。ホーネットのように魔王に変貌してからもうけられる子どもはごく低確率という説は信じるに値しないのか。疑念がシイルの胸中に渦巻く。

「マリアが教育のことを考えているなら、ミルやランのところに預けているのかも。学校に近いのはどうしてもあつちだし」

「そ、そこまで」

「シイルお姉ちゃんもうかうかしてられないね。何なら今すぐにも協力するよ、お姉様とー！」

「私を巻き込まないで。一応シイルちゃんが頼むなら協力するけど」

「うう、ランス様あ！ 私も、ランス様との子どもがほしいですよー！」

普段なら絶対に言えない、秘めたる想いがとめどなく溢あふれ出していた。

上気した肌から汗がふき出して、息をするのにも一苦労。今更ながら魔王をやつてい

たランスと16年の歳月を経たマリアとで体力に大幅な差ができてしまったことを実感する。この後のお風呂場でのまぐわいはもう少し軽めにお願いたいと無意識に思ってしまった。

ランスはマリアのことを案じてじっとしていた。淡い明かりに照らされた青い髪ごと頭をゆつくりと撫でてくれる。愛おしいものを労わるように、大きな手で体温を確かめさせてくれた。

その仕草しぐさに何度でも飽き足らない言葉を思わず口に出す。

「私、ランスのこと、愛してるよ」

ランスは少し笑って、こう言葉を返した。

「ああ。俺もずっと、マリアを愛してる」